

「三条教則」關係資料（十七）

本号は

○『説教するべ草』第一号 山本与助 (明治六年十月)

○『三則百解』 鬼島広蔭? (明治六・七年頃)

○『三条述義』 大賀賢励 (明治七年十二月)

の三点を収める。

『説教しるべ草』第一号 山本与助 (明治六年十月)

本書は版本、和装袋綴で、表紙題簽に「説教しるべ草 一号」とあり、巻頭に大阪(浪花)在住と思われる著者山本与助の「自序」(半丁)を載せ、次いで神誠五ヶ条(一、天津御祖を敬ふべし。一、皇国の御恩を念ふべし。一、人道を守るべし。一、家業を勤め励むべし。一、あしき行ひなかるべし。)の文言を挿入した三条教則の説教風景と思われる小信画の図絵(一丁)を掲げる。そのあと半丁の「目録」(第一号の目次)が「一、御教則三条。一、伊勢参宮の事。一、葛飾権兵衛の事。一、出来心の事。」とあり、この四項目(第一項目が三丁、第二項目が五丁半、第三項目が四丁、第四項目が二丁半)の本文全十四丁が続き、巻末に「明治六年九月免許 同十月上梓 編者大阪塩町三丁目山本与助 書肆同心齋橋筋壹丁目大野木市兵衛版」とあり、全十六丁より成る。本書に関しては、『明治・大正・昭和 神道書籍目録』を見るかぎり、國學院大學図書館に『説教しるべ草』(山本与助編、明治六年七月刊、一冊)と、同大学河野省三博士記念文庫に『説教道しるべ草』(山本与助編、明治七年八月刊、六冊)の、似てはいるが別本であるかのごとき感を与える二種類のものがあるように受けとられるが、実は別本ではない。すなわち、國學院大學図書館所蔵本(明治六年七月刊ではなく、明治六年十月刊の間違い)は同大学河野文庫所蔵本(明治七年八月刊ではなく、明治七年十二月刊の間違い、書名も、道しるべ草、ではなく、単に、しるべ草、である)六冊のうちの第一冊目(第一号)とまったく同一のものである。ちなみに『河野省三記念文庫目録』によると、本書は全六冊(第一号から第六号)で、第一冊(第一号)十六丁、第二冊(第二号)十五丁、第三冊(第三号)十五丁、第四冊(第四号)七丁、第五冊(第五号)十五丁、第六冊(第六号)十七丁である。この同本の第一冊目(第一号)の巻末には「説教しるべ草 従第一号六号迄出版 七号ヨリ続テ出版 南宮上田先生講本 三則童論日安 一人人間心得草 全

壹冊出版 明治七年八月免許 同十二月上梓 編者 大阪塩町三丁目 山本与助 書肆 同心斎橋筋一丁目 大野木市兵衛版」とあって、上田及淵（文政二年生れ、従五位岡山藩儒員、眼医者、明治八年権大講義、明治十二年六月没、寿六十一）の三条教則衍義書（本紀要第二十八号、平成十一年十二月に収録済み）の広告を載せている。

要するに、本文がまったく同じで奥付部分の年月日だけが異なるという点からみて、自序にあるように、本書は、明治六年七月に書かれ、同年九月に免許、翌十月に上梓、そして翌七年十二月にも再度上梓したという経過をたどったものと考えてよいだろう。

次に、著書編者は山本与助なる人物であり、また内容については、例話を取り入れたり、口語調にするなど、河野省三氏が指摘（講座「心学」第四巻所収の河野論文「心学と神道」二十九頁 雄山閣 昭和十七年五月）するように、石門心学者ではないが、あきらかに心学道話風であり、心学的説き方をしていことがうかがえるのである。いったい庶民にもわかりやすく、むつかしく説かないのが心学における道話の一大特徴であって、これもその類と言ってよいだろう。ただ、第一冊中の四項目すべてが三条教則の衍義というわけではないが、広い意味での衍義書関連として第一冊だけは掲載した。もともと、本書は当時において比較的知られていたものであろうか、『明治文化全集 宗教編』や辻善之助『明治仏教史の問題』にも衍義書一覧のなかに明記されている。

なお、翻刻掲載については、國學院大學図書館所蔵本に依った。

### 『三則百解』 鬼島広蔭？（明治六・七年頃）

本書は写本一冊、和装袋仮糸綴、一丁十八行の「神宮司庁」の縦罫紙を使用し、表紙に「三則百解 完」とあり、次いで本文は十三丁より成る。神宮司庁の用紙を使用している点からみると、伊勢の神官による写本とも考えられる。著者については、写本には何も記載がなく、翻刻に使用した「河野省三博士記念文庫」所蔵本の目録にも書名はあ

るものの、著者名については記載がない。その他、『明治文化全集 宗教篇』、梅田義彦『日本宗教制度史 近代篇』、豊田武『日本宗教制度の研究』、『明治仏教思想資料集成』（第二巻の解題部）など、三条教則衍義書の目録などいささかでも載せている文献には本書の名さえ見えない。ただ『明治・大正・昭和神道書籍目録』には本書の著者として、鬼島広蔭の名が見えていて、これはおそらく、辻善之助『明治仏教史の諸問題』中の三条教則衍義書目録の箇所「三則百解（写一） 鬼島広蔭著 六年？」（一七九頁）とあるのを受けてのことであると思われる。したがって、著者名については断定はできないが、今は鬼島広蔭なる人物の可能性があるという程度にしておきたい。

次に、著述の時期についても、写本には何も記載はないが、本文末尾の一丁に「問題」と表題する附録のような箇所があり、そこには、明治六年三月二十二日に教院内で実際の三条教則の説教を想定して少宮司から説教後の聴衆からの想定質問四問を答えるように求められた、という記述がある。すなわち、大教院が成立したあと、教導職としての説教訓練の一風景を伝える記事であることから考えると、著述の成立は明治六年の二月頃よりあまり下らない時期であることが予想される。ただ、これも断定はできないので時期の幅を持たせて、一応は六・七年の頃としておいた。同時に、この末尾箇所「問題」内容は、他の衍義書にはほとんど見受けられない意味で、本書の一特徴でもある。また、この写本には、たとえば「則」の右横部に「章」あるいは「憲」、「之」の右横部に「此」、「対」の右横部に「照」の文字を書き加えるなど、原文に対する写本特有の加字の状態が随所に見受けられる。これも本書の特徴の一つとして、そのまま当該文字の右横部に（ ）をもって示しておいた。

さらに、末尾の十一丁目から十二丁目にかけての衍義で「人道ノ枢要ハ方ト円トニ在リ。云々」という箇所がある。ここは第二条の「天理人道」中、人道の衍義を五典（五倫）という大方が用いる儒教倫理をもって説明するのが一般的であるが、この著述者の場合は、この五典を「方円」というあまり聞き慣れない用語を用いて衍義をしている。事実、写本の当該段落の上部空白部分には「奇説」と墨書してある。これも他書にはほとんど見ることができない本書

の特徵的部分と言えるかもしれない。

なお、翻刻掲載については、國學院大學「河野省三博士記念文庫」所蔵本に依った。

### 『三条述義』 大賀賢勵 (明治七年十二月)

本書は版本一冊、和装袋糸綴である。表紙題簽に「三条述義 全」とあり、表紙見返しに「明治七年発兌 大賀賢勵著 官許三条述義 全 掇英園蔵梓」とあり、巻頭に真宗高田派門主の大教正常磐井堯熙(書は長谷部円祇)の「序文」(明治七年四月)が二丁あり、次いで本文三十四丁が続き、末尾に著者の門人華山大権の「跋」文(明治七年九月)が二丁あって、全三十八丁より成る。

著者の大賀賢勵は、文政二年(一八一九)の生れで、真宗大派の学僧である。伊勢国浄円寺住職、青年時代に広瀬淡窓の咸宜園に遊学し、儒學を身につけたその教養は、本書を閲読すれば一目瞭然である。その他、同派の異安心調理の頓成事件で活躍したことで知られている。著述は本書のほか、『御文四帖目第十五通講義』、『神明三箇条記』、『旭川』などがあるという。

内容は、その経歴が示すように、漢学的教養を遺憾無く發揮したものとなっている。それは「敬神愛国」の衍義よりも「天理人道」の衍義分量の方が多いことでも知られる。他の衍義書の大半はその逆で、神道家のものが多くことあつて、やはり「敬神」解釈が中心となっているからである。そして全体を通して、本書は三条教則衍義書とはいっても読み物というより、漢学儒書類などの数多い引用からみて、説教教導の任にあたる者への、実際の説教時の備忘録、参考文献のような性格を持つと言ふべきものである。

また、本書はすでに『明治仏教思想資料集成』第三卷(昭和五十五年)に収録(二七九頁—二九〇頁)されていて、解題(執筆者は二葉憲香氏)も付されている(同卷四九六頁—四九七頁)が、そのなかでは、たとえば「天皇制国家

の保守的側面のみ強調され、民衆の自発性を喚起すること余りに少なく……」と述べるなど、いわゆる、通り一遍の教条的文言を並べていて、もちろんその評価はきわめて低い。もともと、この程度が仏教界から見た従来の三条教則への評価程度であると言つてよいが、このような一面的な見方による單落的評価は現在ではもうまったく通用しない論法であると共に、正鵠を得たものではないこと、実態はもつと複雑であることなどを主張してきた点からみて、その解題の評価部分に關しては感心し得ないものである。その意味もあつて、敢えて再度の翻刻をした次第である。

なお、翻刻掲載に際しては、國學院大學「河野省三博士記念文庫」所蔵本（河野文庫には本書の写本一冊（和装綴三十六丁）も存する）を使用した。が、所蔵本上部の空白部分にある墨筆文字については原文の体裁を尊重し、当該箇所の文字右横部に（ ）を付して示した（『明治仏教思想資料集成』所収本にはこれはない）。

## 凡 例

（三宅）

凡例については、前号にしたがつた。

『説教する本草』第一号 山本与助 (明治六年十月)

教法は各国なき処あらず。其神州元より神のをしへいみしけれ共、中つ代より儒仏に隔られしに、今や三条の法則に教練の備はりしより、教徒競ふて勉勵し月に日に基く也。され共遠境僻地又届かざる処もあらんには、聊補教にもならんかと、いと思しに筆を採ものは

明六七月 浪花

山本与助





目錄

一、御教則三条

一、伊勢參宮の事

一、葛飾権兵衛の事

一、出来心の事

説教する本草 第一号

三則

敬神愛国の旨を躰すべき事

三條の御教則は程々弁解の有なれども、爰には、只その旨とする処をのべて、幼童女子にも解し安きを要す。敬神とは、神を敬ふ事なり。神は誠を愛玉ふ故、真心を以て敬ふ事第一なるべし。いかに頓首三拝なすともうやまふ心、誠より出ざれば感應有ましき也。又愛国とは、我が国を大切に思ふ事なり。日本は神国なれば、猶以て外国にあなどりを受ざる様に智を磨き、各職務を勉励して、富国強兵を助くべし。

天理人道を明かにすべき事

天理とは、都て天地の理を悟りて、聊にても理に悖る事有べからず。人道を明にすべき事は、君臣、父子、夫婦、兄弟の大倫を乱すべからず。或は朋友の交りとは、信を以てすべし。この人倫の道を失ふ時は、面は人にして人にはあるべからざるなり。主たる者は、よく／＼弁へて家内の者にも言論すべし。

皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

皇上とは、上一人の君様の事なり。今日安穩に暮らす事は、皆この君の影なり。されは日月に均しき恩沢なり。又万民の父母と申せは、君の聖算を万々歳と祈奉るべし。朝旨を遵守せしむとは、何事も仰出されの趣をつ、慎んで承り、相守る事也。別して御一新後は非常の命令も多く出るなれども、決して驚くべからず。只我は愚なれば、是非は知らね共、後に到りては、必善事なるべしと思ひとりて、ひたすらに随従すべし。たとへば子の親たるもの、其子に灸治をするか如し。子は是非を弁へねば、逃まじふて嫌へども、押て居るは親の慈

悲なり。これ後の壯建を思へばなり。朝旨の出る処爰にある物まゝあれば、おろそかに思ふべからざりけるもの也。

### 伊勢参宮の事

天照す御神は伊勢国度会郡山田に鎮座ましまして、皇上をはじめ下万民にいたる迄、普く守らせ玉ふは申も申さず思なり。さればこの御神に歩みを運び、敬する者年々幾万人とも算へかたかるべし。皇国第一の参り処たる事は、みな人の知る所なり。尤日本の宗廟なれば、貴賤何宗の分ちなく尊敬すべきも理也。其御社たるや、白木造りの萱葺にて、白木綿を垂玉ふのみにて、別段珠玉の飾りもなく、仏閣の如く雲箔錦繡の粧ひもなければども、神垣に入るや否哉、忽敬するの心起り、思はずも跪にいたる。仏家には信は莊嚴より起るといひて、本堂は勿論、家々の仏壇迄も過分に飾り立、信に着しむ。その理はさる事なれども、莊嚴によりて信を取しむる扱はちひさき事にて、神の術は廣大にて、さやうなる物にあらず。只古しへを示して、質素を守り、

眼にきらびやかならねばと御神の在す所なれば、何となく心あらたなり。雲霧の晴る思ひをなして拝に着も、その徳大ひなればなり。むかし西行法師この御神に参詣して

### 何事のおはしますかは知らねども

ありかたさにそなみだこほる、  
読れしは殊勝の事なり。御社高大といふにもあらず。何処美麗結構とはあらざれども、唯有かたさに涙こほる、とは、真に実境を得たる歌といふべし。亦芭蕉翁も参詣のとき

### 何の木の花とも知らずひひかな

この発句亦玄妙なり。西行ばせをの兩人御神の事はとくより知りたる事なれ共、何事のおはしますかといひ、何の木の花とも知らずといふは、兩人とも世外の人たる事を表せし也。さて諸国より参詣の多き中にも播州より中国路に至るまで、一郷一村の内には伊勢参宮せざれば男女とも縁付出来ざる処もま、有也。依て十四五にもなれば、先いせ参りをする事也。又村中何事の寄合にも参宮の数多き人を上座に居る風習も有りとぞ。京大阪

杯の伊勢参宮は、先着類を立派に出立荷物を持せ、食事毎に酒を吞大声に放歌し、或は馬駕に乗り、雨の日は旅宿に止まり、兩宮に詣ずるや、否、古市へはまり込み、遊びに長じ、路用を空しくして、連れの者に借り合ひ戻る杯ま、あり。又甚しきに至ては、三五人の連なるに、酒興の余り喧嘩を生じ、放れくにもどりしも聞及べり。必竟伊勢参りは遊参保養を第一と心得違ひより起る処なり。され共、神慮広大無辺なれば、是等も咎め玉はざるなり。遠境僻地の人は都会の人と事替り、四五拾人の大勢なるも、皆親陸にて言葉少なければ、いさかもなく、互ひに助け合、衣服も有合せにて、別に飾らず、草鞋は手製を背負ひ歩行、京大阪へ着ても諸見物もせず、芝居一切も覗かず、只々伊勢の御神に参るのみにて脇目をせざれば、眞の参宮といふべし。予ある年玉造りへ用向有てまゐりし帰りがけ、或茶店に休みしに、隣の床机に田舎の旅人六十余の老人六七人休み居たる。亦こちらの床机に当地の阪老人夫婦も休み居て、かの田舎人に、そこ元は西国をまはり玉ふか二十四拜なる歎と尋るに、我等は伊勢参宮なりと答ふ。

又いふ、いせ参りは若い時の事なり。年寄ては面白からまじ。夫より未来のため、西国か四国の方よかるべきにいかかやと少し嘲る心地なれば、かの田舎人居直りて、そこ許にはいせ参宮は度々なされぬと見へたり。お伊勢様は我國の宗廟、人間はおろか五穀草木、其外一切万物この御神の恵みを蒙らざる物なければ、おろそかならずと存て参り候事なり。度重ねて参ればまゐる程有がたさも弥増り、我等は十四五度も参り候なり。神前に額づけば、只有がたくて涙こぼれ候。夫故百里の道を厭はず、歩みを運ぶなり。そこ許の如く、若い時の遊び参りは有がたさも分りかたく候。半年寄て参り見玉へとありければ、夫婦の老人赤面の体にて立て行く。予この言葉を傍にて聞居たれば、感心あまり其国をたづねれば、備中の由答へて分れたり。是等は実に神國の民たるべし。又神國に生れながら、他邦の仏の奴となりて媚諂ひ崇めんは恥かしきわざならずや。去りながら仏も亦捨べきにあらず。唯本末を忘れざるが肝要なり。神は本也、仏は末なり、心得べし。

葛飾の権兵衛が事

雲萍雜志といへる書に武州葛飾のほとりに権兵衛といへる村長あり。或年の春、伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて、村民十三人と共に御師何某が家に宿るに山海の珍味を尽く馳走ありて後、おの／＼方に薄茶まゐらせんとて案内して茶室へ招き請じければ、かの村長を始めとして十三人席につけば、御師は丁寧にあいさつして心を配り、茶を調て、権兵衛が前に出し置けれども、農夫の身なれば茶道の心得はいさ、かもなければ、大に心をくるしめ場にてして思ひけるは、いかにして飲べきや、人の咄には茶は飲たる上にて順にまはすなど、聞しが、十三人へ一杯ばかりの茶を飲かけまはしたり共、足るべからず。又ひとりして飲、他の者へ鼻あかせん事いかなれども、我村長の身として、今更聞て飲んも口おしき事也とさまざま思ひめぐらす内に、御師は先に出せし口取菓子を取長が前へさし出し、いざ召れ玉へとし為れば、はつと茶をとりあげて残らず飲み、前におきければ、御師は取茶碗をそぎ、又調て村長が前に出しつ、いざ菓子をと玉へといふに、此度は菓子

を食ひ、又茶をのこらず飲で前に置ければ、御師は取茶碗をそぎ、又調て村長が前に出す。村長いひけるは、我等はもはや沢山くだされたりと云ふに、さあらば、次の方へ御おくり有べしとて、この順にして各一椀づつ飲、辞退して座しきへ入りておの／＼ひそかに其心勞を物語りつ、臥し、又も茶の饗応あらばいか計り迷惑すべし、早くいとま乞して帰国するにはしかじとて、あくるを待て発足せり。後に権兵衛、予がもとに來りて願ひ度ことの候へといふに、いかなる事ぞと問ければ、過し春、伊勢にて恥を得し事侍れば、茶の手續を教へ玉はるべしとて、しか／＼の事を物がたり、今も忘れがたく恥かしく、又口をしく覺しといふに、予大に笑ひて、その許は日頃似氣なき不見識の人也、農夫は農家に人となりて農業の事にさへくはしければ恥かしきことなかるべし。茶はもと隠遁の手すさびにして、その道日用に足れりといへども、農夫町人などのいたすべき事にあらず。世をのがれる隠居の後などはともあれ、其許もし茶を学ばば一村みな是にならひて農事に怠りなば、田畑はことごとく不作なるべし。村長茶道を知らざるが故

に耕耘取蔵時にたがはず、國中百人耕して五十人の遊民あらば、その国かならず飢ぬべし。百人耕して十人遊ば、その国果して豊なりといへば、権兵衛感じて茶の湯を習ふ心をおもひとまりぬ。

此書は柳沢里恭先生の隨筆也。民を導の語感ずべし。当今は何国にも学校の設ありて農家の児童も学文をするに至る御仁恤の余沢仰くべし。されば学文は人たるの道を弁へ事理を悟り、富国強兵もこれよりいたるとあれば、農夫たりとも勉てすべきは学文也。忘れてもすまじきは前条の茶道也。奢を導き、氣を慢り、時間を費す。何ひとつ益ある事なし。国内学文に進み、何事も弁ふるにいたらば、三条の御教則も速に行はるゝに至るべし。

### 出来心の事

神々の数々は八百万の神といひておびたゞしき数なれば、野にも海山にもみち、市中はもとより家の内にも満して在すなれ共、人の眼には見へぬ也。こは神々の人の善悪を見留めおきて高間が原にて御詮儀あつて、賞罰を下し

玉ふなれば恐るべき事なり。世に出来心と称して常に正直なる者も、人なき所にては金銀或は品物等ひそかに盗みとる者あり。後日顕はるゝに及ひて全く出氣心なりとて頓首して謝す。爰に依て内濟する物まあり。又人のなき折、男女同座すれば、忽姪欲を生し、私通する者あり。甚しきに至ては強姪し、又は親族に姦して人倫を破る。終には發覺して世間に笑はれて、長く恥辱を残し、或は入丈などは生涯の安逸をあやまり、他邦に走るに至る。是みな神は昼夜とも人の内にみちくゝて在すを知らざるが故なり。只眼先の人を恐れて神々の見玉ふ事を恐れざるは愚の甚しき也。罰に緩急はあれども、天厘にそむき、人道を明かにすべしとの神教にふれ候者はいかか安穩なるべきや。慎むべきの第一也。古語にも、君子は必慎其独といふも是等の事なるべし。

### 説教する本草 第一号 終

『三則百解』 鬼島広藤? (明治六・七年頃)

三則ノ旨ハ皇朝ノ国体ヲ述ル者ナリ。千載不増刊加スヘカラス。亦變更スヘカラサルノ大典ナリ。其本源ハ天照大神ノ神誓ニ由リ、歷代ノ皇上其緒ヲ継キ、毫釐異乱ナキ所以ハ、宇佐大神、和氣公ニ神託シテ曰、我國闢開ヒラキ以來君臣分定ルトアル、乃是ナリ。故ニ敬神愛國ノ旨ヲ体ストハ、彼神誓深義ヲ敬拜シ、神聖修理固成ノ遺業ヲ補助シ、以テ皇上ニ致スナリ。天理人道ヲ明ニストハ、我君臣ノ定分天神ノ確定ニ出ルヲ照明ニスルナリ。皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守ストハ、至誠以大分ノ変改スヘカラサルヲ知り、朝廷ニ奉仕シテ君命ニ違背セサルヲ謂フナリ。其本実嚴乎トシテ伝ヘテ今日ニ至ル。是則我国体ナル者ナリ。

大ヲ欲テ而為サ、レハ、大ヲ成サス。高ヲ欲シテ為サ、レハ、高キヲ成サス。人三則ノ道ヲ好ミシ、口之ヲ称シ、心其義ヲ解スルモ、行ヒ其規ニ当ラサレハ、終身之ヲ欲シテ其旨三則ニ合ハス。是則敬神愛國、天理人道、皇上奉戴、朝旨遵守、咸ク其真旨ヲ味ヘサルニ由ル。宜乎古

人ハ味ヘテ、貧〔貪〕ラス、今人ハ貧〔貪〕テ味ハヘスト。其專心ナラサルヲ戒ムルナリ。

臣民ノ道ハ皇上ヲ奉戴スルニ在リ。而此ヲ奉戴スルニ大綱〔綱〕四アリ。曰ク、神ヲ敬スルナリ。曰ク、国ヲ愛スルナリ。曰ク、天理人道ヲ明ニスルナリ。曰ク、朝旨ヲ遵守スルナリ。此四綱〔綱〕ヲ正クシテ皇上ヲ奉戴スル、之ヲ臣民ノ道ト謂フ。而其至要ハ皇上ヲ奉戴スルニ在リ。此国ニ生レ、此食ヲ食シ、此家ヲ家トシ、而其臣民ノ勤ムヘキヲ勤メス、為スヘキヲ為サスンハ、多能多芸ナルモ、又何ヲカ為シ。只神明ノ冥罰ヲ免レサルノミ。人ノ氣質ニ於ル一旦開化スレハ弱モ強ト為リ、柔モ剛トナル。敬神愛國ノ旨、之ヲ開キテ其意ヲ知ルモ、氣質開化セサレハ其真味ヲ得ス。天理人道ヲ明ニスル、其義ヲ得ルモ、氣質開化セサレハ之ヲ行フコト能ハス。皇上奉戴シ朝旨ヲ遵守スル、其理ヲ念フモ、氣質開化セサレハ功ヲ立ルコト無シ。故二三則ノ旨ヲ奉スル志ヲ立テ、氣質ヲ開化スルヲ要ス。

夫道ニ入ル、自然アリ、工夫アリ。聖者ハ自然ヨリシ、知者ハ工夫ヨリス。此ヲ得サル之ヲ愚者トス。而自然ハ

及フヘカラス。工夫ハナホ及フヘシ。工夫ヲ以道ニ入ル、何ヲカ標ト為シ。愛國之ナリ。人道之ナリ。朝旨遵守之ナリ。愛國ノ標ニ從テ與ヲ極ムレハ、敬神ノ旨ヲ体スルコトヲ得、人道ノ標ニ依テ勤行スレハ、天理ヲ明ニスルコトヲ得、朝旨ヲ遵守スルノ標ニ任セハ、直ニ皇上ヲ奉戴スルノ義ヲ知ル。之ヲ知得シ、以勉強シテ之ヲ行ヘハ、終ニ私心ヲ去り得テ自然ヨリ出ルカ如シ。此ニ至テ彼工夫ヲ得サルノ人ニ比スレハ雲泥霄壤ノミナラズ。

稼セサレハ粟ヲ生セス。蚕績セサレハ布帛ナラス。教則ニ依ラサレハ道ヲ明ニスルコト能ハス。而其教則ニ依ルヤ、勇アツテ且剛ナラサレハ其深奥ヲ極メ真理ヲ明ニスルコトヲ得ス。神ヲ敬シ國ヲ愛スルノ旨ヲ知ルモ、勇ナケレハ之ヲ体スルコト能ハス。之ヲ体スルモ剛ニアラサレバ之ヲ守り得ルコト能ハス。天理人道ヲ明カニシ、皇上ヲ奉戴シ、朝旨ヲ遵守スル、亦然リ。初メ道ニ入ルハ勇ヲ以シ、之ヲ守ルニ剛ヲ以シテ、而終始全シ。則之ヲ能ク道ヲ明ニスルコト云フ。

一人之ヲ非トスレハ、忽チ行ヲ廢ス。然ルヲ一家之ヲ非トシテ力行シテ、而惑ハサル者寡シ。況ヤ一國一列之ヲ

非トシ、而力行シテ惑ハサル者弥希ナリ。而道ヲ信スルノ篤キ、所謂豪傑ノ人特立独行、必ス義ヲ取り、行必果ス。故ニ神ヲ敬スルニ篤フシテ、必愛國ノ旨ヲ体認ス。天理人道ヲ明ニスルニ篤フシテ、必皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守ス。教則ハ三箇ニシテ之ヲ行フ、乃一ノ篤キヲ基トス。

人タルヲ学フ所以ノ者、之ヲ道トイフ。而之ヲ学ヒサル、之ヲ倫外ノ人トス。故ニ道ヲ学ヒサレハ、以人タルコトヲ得ス。事ニ処シ物ニ接スルノ要、徹上徹下咸ク道ニ依ラサルナシ。而事ニ枢要アリ。道ニ本源アリ。枢要ト本源トヲ得レハ、其枝葉自ラ正直ナラサルナシ。而事物ノ枢要ハ知ラサルモ、其失ナホ淺シ。道理ノ本源ヲ得サレハ、必大過ナキ能ス。夫道ノ本源トハ、則敬神ノ旨ヲ体スル是ナリ。神ハ万物ノ主宰ニシテ、天地間ノ万事悉ク神ノ妙用也。故ニ至誠以神ヲ敬シ、顯幽式ハス。死生貧富神ニ依頼シテ、以人事尽ク之ヲ道ノ本源ヲ知ルト謂フ。本源ヲ知テ之ヲ行ノ実、如何ノ國ヲ愛シ、天理人道ヲ明ニシ、皇上ヲ奉戴シ、朝旨ヲ遵守スル是ナリ。此教則ヲ全クシテ、之ヲ行フ。之ヲ人タル所以ノ道ヲ学

ヒ得ルト謂。

三箇ノ教規ハ修上達ノ階ナリ。一物一則一事一言一動、宜咸ク之ニ昭準シ、神ヲ敬シ、国ヲ愛スルノ旨ヲ体シ、天理人道ヲ明ニシ、皇上ヲ奉戴シ、朝旨ヲ遵守スルノ義ニ合ハサレハ、至緘至悉ト雖、以之ヲ閑キ、熟考細思シ、志ノ嚮フ所ヲ正シ、戒謹恐懼シテ修徳ノ進歩ヲ要シテ利祿ノ上達ヲ欲スル勿レ。

其中敬スル者ハ外必直シ、思慮言為ノ際、吾義ニ非サレハ一毫モ取ルナシ。而其非義ヲ畏ル、ヤ毒螫ヨリ過ク。

其利ヲ捨テ其誼ヲ正シクシ、其功ヲ索メスシテ其道ヲ明ニシ、周旋遲速義ト俱ニス。故ニ其中敬スル者ニアラサレハ、神之〔ヲ〕受ケス。愛国ノ旨ヲ体シ、天理人道ヲ明ニシ、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守スル、皆中心ノ敬ニ出テサレハ能ハス。口耳之ニ達スルモ、所謂夢中ノ喫飯ナリ。

窮シテ濫セサル、之ヲ君子ト云ヒ、窮シテ濫スル、之ヲ小人ト云ヒ、窮セスシテ濫スル、之ヲ悪人ト云フ。而君子トナリ、小人トナリ、悪人トナル。皆我ニ在テ他ニアラス。道ヲ行フニ切実ナルト、淺薄ナルト、行ハサルト

ノミ。而其道ニ枢要アリ。所謂三章ノ教規之ナリ。而敬神愛国ノ旨ヲ体スル、更ニ高遠深奥ノコトノミニアラス。神恩ヲ思ヒテ一拝シ、国恩ヲ知テ道路ノ一塵ヲ除クモ、則敬神愛国ナリ。楽テ之ヲ行フヲ上トシ、勤メテ行フヲ中トシ、怠テ行ハサル、之ヲ下トス。天理ハ索テ他事ヲ為スニアラス。口ノ言ヒ、目ノ見ルニ等シク、為スヘキヲ為ス。之天理ニシテ、之ヲ行フ、則人道ヲ明ニスト云フ。皇上ハ国ノ柱礎、朝旨ハ国ノ四維、其義ヲ奉戴遵守スル、亦別事ニアラス。行住坐臥微事モ能ク其誼ニ合フヲ云フナリ。君子小人悪人ノ際、皆如此ク細微ニ起ル所以ヲ知テ君子タランコトヲ勤行セスハルアルヘカラス。万物ヲ主宰スル、之ヲ神徳ト云フ。海内ヲ統御スル、之ヲ皇徳ト云。而神徳皇徳万民ニ及フ、之ヲ神恩皇恩ト云フ。而人民タルモノ、此ニ恩ニ漏ルナシ。故ニ此ニ恩ニ報ヒサルハ人倫ニアラズ。然ラハ則之ヲ報スルニ何ヲカ為シ。神恩ニ報スルニ国ヲ愛シ、皇恩ニ報スルニ朝旨ヲ遵守スベシ。之則神ヲ敬シ皇上ヲ奉戴スルノ義ニシテ、其実咸ク報恩ナリ。此理ヲ知り、此理ヲ行フ、之ヲ天理人道ヲ明ニスルノ一端トス。



神ハ彼ニアリ。敬ハ我ニアリ。国ハ彼ニアリ。愛ハ我ニ

スル所ニ従フ。

アリ。天理ハ彼ニアリ。人道ハ我ニアリ。皇上朝旨ハ彼ニアリ。奉戴遵守ハ我ニアリ。而如此ク神アリ、国アリ、天理アリ、皇上朝旨アル。其事ヲ解シ、其理ヲ推セハ、其徳人ニ各身ニ帰セサルナシ。故ニ之ヲ敬シ、之ヲ愛シ、之ヲ明ニシ、之ヲ奉戴遵守シ、此四恩ニ報スレハ、其返照己レニ帰シテ、身立サルコトナシ。此四恩ヲ忘却シテ報ヒサレハ、其反对己ニ帰シテ身亡ヒサルコトヲ得ス。人ノ發達ハ必ス神明ノ助護ヲ頼マスシテ、必ス神明之ヲ助クル者也。故ニ發達ヲ欲スルモノ神ニ依頼シ、索ムルノ念アレハ反テ其域ニ入ル能ハス。且神之ヲ助ケス、而只其域ニ入ルニ一道アリ。一步其道ノ外ヲ踏メハ發達ノ精氣分散シテ、亦収ムヘカラス。而其道ハ則人道ナリ。而人道ヲ正クスルニ、自ラ其当否ヲ知ルノ權衡アリ。乃天理ノ昭明ナルヲ以之ニアツ。此理ヲ知ラサレハ人道ヲ正シクスル能ハス。而天理ノ昭明トハ、何ソ君臣ノ分之ナリ。君臣ノ分ヲ知レハ皇上朝旨ヲ奉戴遵守シ、生々主宰ノ功勞ヲ偵ヒテ国土ヲ保愛シ、其本源ヲ推シテ神徳ノ洪大ナルヲ知ルニ至ル。此ニ至テ、而後二人ノ發達其欲

人道ヲ明ニスルノ緊要ハ克己ノ一言ヲ親歴スルニ在リ。時ニ正心ノ奮發興起セントスルモ、忽チ私心之ヲ障礙ス。況ヤ剛烈ノ氣ナキ者ハ、之ニ由テ卒ニ生涯ヲ失ツ。故ニ耐久堅忍シ、忠厚廉節、以テ己ニ克テ人道ヲ明ニシ、天理ニ従ヒ、能ク人ヲシテ觀感興起セシメ、互ニ相師法トシ、専ラ国土ノ裨益ヲ実験シ、艱難災禍ニ敵シテ保愛ノ功勞ヲ尽シ、朝旨ヲ遵守シテ専心勉力、以テ国體ヲ信遵（信遵）嚴ニシ、神ヲ敬シ、皇上ヲ奉戴シ、幽顯ノ高恩ヲ報謝シテ道ノ粹純ヲ極メ、万物ノ靈長トシテ一ノ私心ニ役使セラル、ノ謗ヲ免ルヘシ。勉強ハ人ノ本分、勉強ニ由テ百事ナル。而喜心ノ勉強アリ。苦心ノ勉強アリ。喜心ノ勉強ハ其成功分外ニシテ、苦心ノ勉強ハ成功、分ニ応ス。故ニ苦心ノ勉強ハ喜心ノ勉強ニ如カス。而喜心ヲ生スルハ天理人道ヲ明ニセサレハ能ハス。夫天理ハ人ノ勞作ニ応シテ福運ヲ開カシム。其理ヲ知レハ勞事ハ則發達ノ基礎ナルヲ知ル。故ニ自ラ喜心ヲ發シテ勉勵セサルヲ得ス。而所謂勞事ノ準的ハ何ソ朝旨ヲ遵守スル之ナリ。勉強シテ事実ハ何ソ、国ヲ愛

スル之ナリ。如此ク勤ムヘキ順序ヲ明ニシテ、神ヲ敬シ、皇上ヲ奉戴シ、而後ニ凡百ノ人事、其規ヲ逾ヘス。而其応万倍ス。苦心ノ勉強ハ焉ニ異ナリ、真理ノ目的未定ラス。事ニ臨ミ、心裏ニ疑念アリテ再三苦慮シ、毎事快速ヲ得ス。其業自ラ勉カツ至極ヲ得ス。故ニ報亦自ラ淺シ。蓋苦心ハ因循ニ愈ルコト万々タリト雖トモ、喜心ノ勉強ニ及ハサルコト亦甚遠シ。

取堅腰ヲ折ル、頷セサルヲ得ス。乳童手ヲ供ス。亦戯ルヘカラスト。善哉、敬礼ノ真味ヲ解クヤ、言進ニシテ意甚深シ。微細ノコト返対ナホ如此、況至誠以敬礼ヲ尽シ、神明ニ奉仕シ、皇上ヲ奉戴シ、国ヲ愛シ、朝旨ヲ遵守スルニ於テヤ。夫人間万事返対ナラサルナシ。人我ヲ好ミスルハ、人我ヲ好ミスルノ返対、人我ヲ悪ムハ、人我ヲ悪ムノ返対、人我ヲ尊ムハ、人我ヲ尊ムノ返対、人我ヲ侮ルハ、人我ヲ侮ルノ返対、今日善行アレハ、来日善事ノ返対アリ。今年悪行アレハ、来年悪事ノ返対アリ。時ニ從テ遲速アルモ、必ス返対ヲ免ル、ハナシ。此天理昭然ナルヲ知テ己ヲ省ミ、返対ヲ懼シ、人道ヲ明ニシ、神明ノ咎、皇上ノ罰ヲ蒙ル勿レ。

至誠ノ義ヲ知ル、難キニ似テ甚易キナリ。男子児ヲ生ムヲ夢ミス、女子妻ヲ娶ルヲ夢ミスト。之則心裏絶テ無キニヨル。夫心裏ノ至誠ヲ知ルヤ、夢寢ニ之ヲ徴スルニ如カス。絶テ悪ヲ去レハ、男子ヲ生ムヲ見ス。女妻ヲ娶ルヲ見サルカ如シ。豈亦更ニ悪ヲ夢ミンヤ。又只善ヲ為スヲ焉夢ミルノミ。是心裏至誠ノ徴ナリ。夢寢為ス所敬神愛國、天理人道、皇上奉戴、朝旨遵守ノ旨ニ合フニアラサレハ、神明ノ心ト合一ナルニアラス。心神明ト一ナラサレハ大善ノ行モ至誠ニアラス。而至誠ノ当否ハ如此ク夢寢ニ由テ徴スルハ知ルニ易シ。

金玉ハ人ヲシテ富貴ナラシムル者ニアラス。書籍ハ人ヲシテ聖賢ニ至ラシムル者ニアラス。只貧富賢愚之ヲシテ、能ク富貴聖賢ニ至ラシムル者ハ一ノ志ノミ。只志此ニ在テ剛壯ナレハ、物ヲ致シ事ヲ致ス。志此ニ在ラサレハ、富貴ノ家ニ生ル、モ、忽財散シ保ツコト能ハス。貧賤ニ生ル、モ、志此ニ在レハ必能ク富貴ニ至ラサルナシ。文学ニ於ル亦等シ。其至ル所優劣アルハ、志ノ優劣アルノミ。所謂ル命ヲ造ス者ハ天命ヲ立ツルハ我ナル者ナリ。而学士ノ為ス所、一人一己ノ為ニ為スハ所謂私欲ニシテ、

之ヲ為スハ、猶為サ、ルカ如シ。而專ラ人ヲ為ニ為サント  
為ス者、反テ人ノ為ニ為スコト能ハス。一己ノ修業能ク  
其誼ニ合フトキハ、則必ス能ク其徳人ニ及ヒ、自ラ能ク  
人ノ為ヲ為ス。富貴ニ至ルモ亦然リ。而其修待ハ何ソヤ。

天理人道ヲ明ニナス、之ナリ。天理人道ヲ明ニナスハ何  
ヲ以テ之ヲ能クス。神明ノ冥助ヲ敬礼シ、国土ノ載

〔戴〕恩ヲ報愛シ、皇上奉戴ノ大分ヲ奉シテ朝旨ヲ遵守  
スル、此ナリ。造事之ヲ以規矩トナシ、従事之ヲ以準繩  
トナシ、而志剛毅ニシテ屈セサレハ、貧賤モ損スルコト  
能ハス。繁劇モ減スルコト能ハス。物トシテ致サ、ルナ  
ク、事トシテ遂ケサルナシ。

人道ノ枢要ハ方ト円トニ在リ。君父夫長ノ徳ハ方ニ、臣  
子婦幼ノ徳ハ円ニ、朋友ノ徳ハ方円互ニ相對スヘシ。五  
分如此ク方円ノ徳ヲ以之ヲ修ムヘク、以相協和スヘシ。  
焉ニ反シテ、而方ト方ト對スレハ、大分紛乱シ、円ト円  
ト對スレハ、大分混同シ、方円ノ位置顛倒スレハ、則人  
道滅シテ国亡ヒサルナシ。嗚呼慎セサルヘケンヤ。人倫  
方円ノ徳タル、而皆天理ニ当ル所ナリ。日月地球体ハ円  
ヲ以シ、氣候ハ四氣ヲ以シ、方位ハ四隅ヲ以ス。人ハ一

小天地ナリ。此理ヲ備ヘテ、以德ヲ修メ、国ヲ愛シ、神  
ヲ敬シ、朝旨ヲ遵守シ、皇上ヲ奉戴スルノ大義ヲ全クス  
ヘシ。故ニ人道ノ枢要ハ方円ニ在ト謂フ。

#### 問題

今度国禁ノ高札ヲ引卸スノ令アリ。且全權大使ハ我國ヘ  
モ外教ヲ入ルノ談判ヲ英ニテ取行レシ由、新聞ニ見エタ  
リ。抑外教ヲ容ルレハ、我人民ノ智識ヲ開ク基トナルカ、  
將タ我教法ノ行レサル基トナルヘキカ、其得失如何。

今般皇后皇太后ノ二宮御黨并ニ鉄漿ヲ被廢タリ。右ハ如  
何ナル故ニテ一般ノ婦女眉ヲ刷リ、齒ヲ染ルハ得失如  
何。

神教儒教ニテハ一夫數婦ヲ娶ルヲ許シ、洋教ニテハ一夫  
一婦ニ限り、仏教ニテハ婦ヲ娶ルヲ許サス。其得失如何。  
教法ヲ盛ニ行フハ富国強兵ノ基ナル説。

右ノ四則、之ヲ聴衆ノ質問ニ擬シテ答語ヲ認差出ヘシ。

明治六年三月十二日、教院ニオイテ少宮ヨリ教会ノ節ナドニテ聴衆ノ尋有之詞、  
イカ、答フトノ事

『三条述義』 大賀賢勵 (明治七年十二月)

夫三章教憲者誘導黎庶之綱領也。然而言辭簡易意味深長。苟從事教門者殫精研窮心得其肯綮而後須開群蒙也。于此權少講義大賀賢勵着三条述義一篇。詞理精確有可觀者既得教部之允可、今將上梓。賢勵為人謹厚篤実書中所言懇切亦足以發蒙而啓聵矣。以此書誘掖子弟諄々不倦則庶幾充開導之一歟。是余所以不辭而序之也。于時明治七年第四月。

大教正常磐井堯熙

長谷部円祇謹書

三条述義

權少講義大賀賢勵謹撰

可<sup>レ</sup>體<sup>キ</sup>敬神愛國之旨<sup>ヲ</sup>事

治國之要、在<sup>レ</sup>一<sup>ニ</sup>民心<sup>ニ</sup>。民心不<sup>レ</sup>一、則闕牆紛起、与同

斥異、或至<sup>レ</sup>相仇視<sup>シ</sup>。四海之所<sup>ニ</sup>以囂囂然<sup>ス</sup>也。夫人心之

不同雖<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>其面<sup>ト</sup>然<sup>ト</sup>、政教以道<sup>レ</sup>之、億兆一途、不<sup>レ</sup>違<sup>ハ</sup>方

向<sup>フ</sup>何異同<sup>カ</sup>之有<sup>シ</sup>。我邦中古立<sup>ル</sup>教者<sup>三</sup>、曰神、曰仏、曰儒。奉<sup>ル</sup>其教者、率違<sup>フ</sup>管見之私<sup>ヲ</sup>不能<sup>ニ</sup>審<sup>ニス</sup>。国家立教之意、与<sup>テ</sup>各教至理之所<sup>レ</sup>有<sup>シ</sup>。競以<sup>テ</sup>相排斥<sup>ス</sup>為<sup>シ</sup>務、人心破裂、殆至<sup>ニ</sup>于不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>取合<sup>ス</sup>矣。可<sup>シ</sup>勝嘆<sup>ス</sup>哉。

謹按<sup>ニ</sup>三条之教旨<sup>ヲ</sup>、只是率<sup>テ</sup>天地固有之道<sup>ニ</sup>以立<sup>ル</sup>教而已。非<sup>ル</sup>必由<sup>シ</sup>古道<sup>也</sup>也。然而三教之旨、宛乎<sup>シ</sup>不能<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>範圍<sup>ヲ</sup>。可<sup>レ</sup>謂要言不<sup>レ</sup>煩<sup>ナ</sup>矣。自今以往、祠官之導人、以<sup>シ</sup>三条<sup>ヲ</sup>緇流之誘<sup>フ</sup>民以<sup>ス</sup>三条<sup>ヲ</sup>。乃嚮之相仇<sup>シ</sup>視者、不<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>不和而為<sup>シ</sup>兄弟<sup>ト</sup>。欲<sup>シ</sup>億兆不<sup>レ</sup>一心<sup>ト</sup>得乎。三件之旨、教導之官、所<sup>ニ</sup>由<sup>テ</sup>設<sup>ル</sup>其在<sup>ニ</sup>於此<sup>ニ</sup>乎。

敬肅也、謹也。在<sup>レ</sup>貌為<sup>レ</sup>恭在心為<sup>レ</sup>敬。而敬主<sup>シ</sup>事。敬神之敬、蓋有<sup>ニ</sup>畏敬之義、有<sup>ニ</sup>愛敬之義。何<sup>ト</sup>則天祖之基<sup>ニ</sup>於洪業<sup>也</sup>也。体<sup>ニ</sup>於太陽<sup>ニ</sup>、以照<sup>シ</sup>徹六合、寄<sup>セ</sup>德於玉<sup>ニ</sup>。寓<sup>ニ</sup>明於鏡<sup>ニ</sup>、託<sup>シ</sup>威於劍、手授<sup>テ</sup>諸皇孫、以為<sup>シ</sup>天位之瑞。三器之在世<sup>ニ</sup>、猶<sup>シ</sup>三辰之懸<sup>ニ</sup>於天、德輝灼<sup>リ</sup>燭於無窮<sup>ニ</sup>矣。

嗚呼拳<sup>レ</sup>頭見<sup>ル</sup>日、清廟巖然、神威不<sup>レ</sup>違<sup>ハ</sup>顏咫尺、豈可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>畏<sup>シ</sup>敬之哉、豈可不<sup>レ</sup>愛<sup>シ</sup>敬之哉。神孫仰<sup>キ</sup>天祖之遺影於鏡<sup>ニ</sup>、膝下孝敬、累世相承、至<sup>ニ</sup>瑞籙朝<sup>ニ</sup>神人異<sup>ス</sup>居者、所以<sup>シ</sup>畏<sup>シ</sup>神威<sup>也</sup>也。神孫猶然、天下誰敢不<sup>レ</sup>畏<sup>シ</sup>敬<sup>也</sup>。

人之異<sup>ナ</sup>于禽獸<sup>ニ</sup>也、無<sup>ク</sup>羽鱗<sup>ニ</sup>、無<sup>ク</sup>爪牙<sup>ニ</sup>。如無<sup>ク</sup>天祖開<sup>キ</sup>衣食<sup>ノ</sup>之原<sup>ヲ</sup>、以惠<sup>ム</sup>于後世<sup>ニ</sup>。万民何<sup>ヲ</sup>以得<sup>テ</sup>居<sup>ル</sup>寒熱<sup>ニ</sup>而免<sup>ル</sup>饑渴<sup>ノ</sup>哉。神沢優渥<sup>シ</sup>、滄溟猶淺<sup>シ</sup>。天下誰敢<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>愛敬<sup>セ</sup>。夫父子主恩<sup>ヲ</sup>、君臣主義<sup>ヲ</sup>。是以臣之於<sup>ル</sup>君<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>合則去<sup>ル</sup>。父過<sup>ト</sup>則子爭<sup>ム</sup>。雖<sup>レ</sup>爭而不<sup>レ</sup>容<sup>レ</sup>、幾諫号泣<sup>シ</sup>、尽<sup>ス</sup>愛敬<sup>ヲ</sup>而已<sup>ニ</sup>。固無<sup>ク</sup>可<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>之理<sup>ニ</sup>。在<sup>テ</sup>支那<sup>ニ</sup>、同姓之臣<sup>ノ</sup>、寧易<sup>ニ</sup>置其君<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>身退<sup>ル</sup>者<sup>、</sup>無<sup>ク</sup>他欲<sup>シ</sup>、全<sup>ク</sup>恩義<sup>ヲ</sup>也。我皇宝祚<sup>ノ</sup>之隆、自<sup>レ</sup>天地開闢<sup>ニ</sup>、蓋經<sup>テ</sup>幾億<sup>ノ</sup>萬紀<sup>ヲ</sup>、而一系不<sup>レ</sup>移<sup>ル</sup>、元元之民、孰有<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>係<sup>レ</sup>屬於神<sup>ニ</sup>者<sup>上</sup>焉。乃君臣之際<sup>ニ</sup>、恩義備具<sup>スル</sup>者、非<sup>ニ</sup>異邦之所<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>比也。然而頑然不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>敬<sup>ル</sup>神者<sup>、</sup>禽獸已<sup>ニ</sup>非<sup>ル</sup>人也。人而禽獸<sup>、</sup>胡不<sup>レ</sup>遘死<sup>ス</sup>乎。神祇列<sup>レ</sup>于祀典<sup>ニ</sup>者、固<sup>ヨリ</sup>其多也。靈德固<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>測也。豈得<sup>レ</sup>一一數<sup>フ</sup>其功業<sup>ヲ</sup>乎。抑如<sup>ク</sup>素盞鳴尊<sup>、</sup>五十猛命<sup>、</sup>生布木種<sup>、</sup>大己貴命<sup>、</sup>少彥名尊<sup>、</sup>制<sup>カ</sup>醫療禁厭<sup>ノ</sup>之法<sup>、</sup>足以窺<sup>フ</sup>一斑<sup>ヲ</sup>矣。嗚呼我輩<sup>、</sup>所以生育<sup>スル</sup>、孰非<sup>ニ</sup>神賜<sup>ニ</sup>焉。豈可不<sup>レ</sup>畏愛敬<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>哉。神者名<sup>ル</sup>靈妙<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>測也。靈德至妙<sup>ニ</sup>而不可<sup>レ</sup>測。是以惠<sup>ム</sup>民無<sup>レ</sup>算。此其所<sup>レ</sup>以不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>敬也。雖然<sup>、</sup>唯謂<sup>テ</sup>其有<sup>ト</sup>功德於我<sup>、</sup>而報<sup>レ</sup>之以<sup>レ</sup>敬<sup>ル</sup>則陋也。必也明<sup>ニ</sup>乎神人之分<sup>、</sup>貴

賤<sup>ノ</sup>之等<sup>ニ</sup>而後敬<sup>ス</sup>之<sup>、</sup>是為<sup>レ</sup>得<sup>ト</sup>之<sup>ヲ</sup>。敬神之不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>已<sup>、</sup>在<sup>テ</sup>禹域<sup>ニ</sup>、亦為<sup>ニ</sup>治國之第一<sup>ニ</sup>義<sup>ト</sup>。易曰、聖人以<sup>レ</sup>神道<sup>ヲ</sup>設<sup>テ</sup>教<sup>ヲ</sup>、而天下服<sup>ス</sup>矣。中庸曰、明<sup>ニ</sup>乎郊社之禮<sup>、</sup>禘嘗之義<sup>、</sup>治<sup>レ</sup>國其如<sup>キ</sup>示<sup>レ</sup>諸掌<sup>ニ</sup>乎。不<sup>レ</sup>其然<sup>乎</sup>。況於<sup>ニ</sup>我神州<sup>ニ</sup>乎。仏教亦以<sup>レ</sup>敬神<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>貴<sup>ト</sup>。大無量壽經曰、不<sup>レ</sup>畏<sup>ニ</sup>天地神明日月<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>肯作<sup>レ</sup>善<sup>、</sup>難<sup>ク</sup>可<sup>レ</sup>降化<sup>ス</sup>。自用僣慢<sup>、</sup>謂<sup>レ</sup>可<sup>ト</sup>常爾<sup>、</sup>無<sup>ク</sup>所<sup>レ</sup>憂懼<sup>、</sup>常懷<sup>レ</sup>僣慢<sup>、</sup>如是<sup>、</sup>衆惡<sup>、</sup>天神記識<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>其然<sup>乎</sup>。敬神之本<sup>、</sup>在<sup>レ</sup>正<sup>ス</sup>心術<sup>ニ</sup>。心苟有<sup>レ</sup>瑕<sup>、</sup>雖<sup>レ</sup>拜跪是謹<sup>、</sup>乎、雖<sup>レ</sup>享獻是盛<sup>、</sup>乎、只是外敬而已<sup>。外敬神不<sup>レ</sup>屑也。何以知之。曰、人道出<sup>テ</sup>乎天道<sup>ニ</sup>、而天道原<sup>キ</sup>乎神道<sup>ニ</sup>也明矣。然則人也、天也、神也、三而一<sup>、</sup>一而三也。其道一也。而心不<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>道<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>乎。心不<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>道<sup>ニ</sup>、則人與<sup>ニ</sup>天神<sup>ノ</sup>異<sup>ニ</sup>道也。人與<sup>ニ</sup>天神<sup>ノ</sup>異<sup>ニ</sup>道<sup>、</sup>則人雖<sup>レ</sup>敬<sup>ル</sup>之<sup>、</sup>神豈<sup>レ</sup>屑<sup>レ</sup>之<sup>乎</sup>。故曰、外敬神不<sup>レ</sup>屑也。何以知<sup>ル</sup>人道出<sup>テ</sup>乎天道<sup>ニ</sup>、而天道原<sup>キ</sup>乎神道<sup>ニ</sup>也。曰、孩提之童<sup>、</sup>無<sup>ク</sup>不知<sup>ル</sup>愛<sup>ル</sup>其親<sup>ヲ</sup>也。及其長<sup>スル</sup>也、無<sup>ク</sup>不知<sup>ル</sup>敬<sup>ル</sup>其兄<sup>ヲ</sup>也。惻隱羞惡辭讓是非<sup>、</sup>皆發<sup>シ</sup>於性<sup>ニ</sup>、而不<sup>レ</sup>假<sup>レ</sup>作為<sup>。不<sup>レ</sup>假<sup>レ</sup>作為<sup>、</sup>豈非<sup>ニ</sup>天</sup></sup>

乎。書曰、天叙有典。亦然、天祖之御天也、光彩照一徹  
六合、万彙資以立焉。生物不已、其仁也、使物美盛、其禮也、  
也、四者確然不差、其信也。於使物各得其實、其義也、使物貞固、其智  
也、萬彙資立、地五常之德見矣。然而以伊尹諸尊為父、以忍穗  
耳尊為子。而為之娶、栲幡千千姬以繼統。以素盞  
鳴尊為弟、以天兒屋命、天太玉命等為臣。高皇產  
靈尊、每參天上之議、則此為其友也。五典之叙巖確  
如此。所謂天叙有典者、蓋非偶然也。故曰、人道  
出乎天道、而天道原乎神道。易曰、大人者與天地合  
其德。與天地合其德、則與神合其德也。故曰、  
人也、天也、神也、三而一、一而三也。易曰、同声  
相應、同氣相求。苟合德於神、雖澗溪之毛、蘋蘩之菜  
以享之、神之不吐也必矣。故曰、敬神之本、在正  
心術。  
天尊地卑、君臣也。坤道其順乎、承天而時行、夫婦也。  
大哉乾元、萬物資始、父子也。萬物並育而不相害、兄弟  
也。同声相應、同氣相求、朋友也。五典之叙、在天地  
秩然不紊、則人受其中、以全天德者、不亦宜哉。  
抑至其所、以然、則有使之然者、天道豈其偶然  
哉。苟不固靈威靈德、可御天者、其能得下冥冥漠

中、施無量妙用上乎。程伊川曰、天專言之、則道也。  
以形体謂之天、以主宰謂之帝、以功用謂之鬼  
神、以妙用謂之神。解至於此、天神之尊、罔兩無跡  
殆使人茫然不能為思。雖然、異邦之人、固不知  
有天神、則為之謬解、亦不足怪者矣。  
天祖也者、御高天原之神也。豈可舍此神而求蒼  
天主宰於他哉。說者或曰、体天之仁、則天之明、奮  
天之威、以照臨万邦。信斯言也。神之於天、為落  
第二流乎。然則天神之外更有上帝也、不通甚焉。  
敬神之事、在守其位。神者天之主宰也。人受其命、以  
為士工商農、則四民各固守其位、不殞其業、所以  
立命事神也。立命事神、非敬而何。  
敬神之道、以祭祀為重。当天祖之時、已有大嘗之  
儀、而有齋鏡之教、則我邦祭祀之典、所由來、蓋亦  
尚矣。至瑞籬朝、大經天業、盛祭神祇、祭政維一、  
民皆知所向。其詔曰、導民之本、在於教化。今既  
禮神祇、災害悉息。今也設為教部之官、繼述先志  
者、仁孝弘大、使人感奮興起。庶幾億兆一心、奉  
承祭祀、熟乎報本反始之義矣。神威於是乎立、人

道於是乎成。然後國光遠照耀于海外而已。

問、日神者、日即神耶、豈日先有、而神依之耶。神之入天石竈也、六合如晦、則神外果無日耶。日者大陽而固懸於天者也。神者生於下界而上天者也。

然則神外果有日耶。答、神之未生、無日也。神生而后有日也。然則似神外無日也。雖然日者大陽而無四體也。無耳目鼻口也。神則能視能聽、豈無四體与耳目鼻口乎。然則似神外有日也。此殆難為解矣。雖然請試解之。

蓋有陰陽而后有天地矣、有天地而后有日月矣。書紀曰、清陽者薄靡而為天、陽也、重濁者淹滯而為地、陰也。是為天地之剖判。方是之時、天造草昧、陰陽未交理焉、日月未懸於天焉。至伊弉諾尊、伊弉尊、陰陽始調和焉、国土山川成焉、人禽草木生焉、所謂天地位焉、万物育焉也。於是生日神以為之主宰。而后大陽懸焉。神之光華、与此融洽無間耳。譬如聖賢体中之氣、洪然塞于天地之間、而無此際。此其所

以照徹六合而化生万物也。然則神也、日也、一而二、二而一已。

天地者一大物也。日月星辰繫焉、風雨雲雷行焉。人者一小物也。亦有手足耳目百骸、羅列一身。而統之者

心也。手足待心而捉行、耳目待心而聽視。是其所以順從協和不相害也。若使耳目手足各存其心、則手欲捉而足不行、舌欲嘗而齒不合。足与手違、舌

与齒背、無一身所立也。古典所載、日月風雷、各有其神存。而一毫不悖、變調融化、所以生育万物者、以群神一其德、而日神為之宰故已。且以易論之。伊弉諾尊、伊弉冊尊、猶乾坤、日神猶乾元、

群神猶亨利貞、元以主春、亨以主夏、利以主秋、貞以主冬。四德一致、而繞之者元也。日神主日、月神主月、風神主風、雷神主雷、群神一德而統之者日神也。如此則何乖角齟齬之有。

敬神之要、在於愛國、而愛國之念、發於敬神。二者唇齒相資、輔車相依。何則八洲天神之所降誕、元氣之所鐘凝、土壤風俗、冠絕字內。古稱瑞穗國者、豈為誇乎。且天統一系、絕無中原逐鹿之患。為木為石則已。苟有血氣者、雖三尺之童、莫敬神之心不鬱勃於胸中者矣。天下孰不庶幾皇道之隆、國家之盛哉。

夫我君神孫也。我國神域也。張<sup>二</sup>皇皇道<sup>一</sup>、富<sup>二</sup>強<sup>一</sup>國家、  
所以敬<sup>レ</sup>神也。敬神愛國、合<sup>レ</sup>以爲<sup>二</sup>一條<sup>一</sup>、其旨深哉。

愛慕也、重也、惜也。愛國之愛、蓋有<sup>二</sup>愛重愛慕愛護<sup>一</sup>之  
義。我邦天神之所<sup>レ</sup>經營、皇孫之所<sup>レ</sup>光臨、与<sup>二</sup>如下<sup>一</sup>後梁太

祖以盜賊之傑豪、蹶然制<sup>レ</sup>御<sup>二</sup>天下<sup>一</sup>、霄壤懸隔、水炭  
相反。豈可不<sup>レ</sup>愛<sup>二</sup>重<sup>一</sup>愛慕之<sup>レ</sup>哉。雖然不知所以

愛<sup>二</sup>護<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>法、則嚮之所<sup>レ</sup>愛重愛慕<sup>一</sup>者、或至<sup>二</sup>于有<sup>一</sup>龜

王毀<sup>二</sup>於櫝中<sup>一</sup>之過歟。夫天地者、以<sup>二</sup>生物<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>心。故生

化無<sup>レ</sup>息。然非<sup>二</sup>人力<sup>一</sup>以財<sup>二</sup>成之<sup>一</sup>、輔<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>之、則不能

成<sup>二</sup>化育之功<sup>一</sup>也。宝祚之隆、与<sup>二</sup>天壤<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>窮者神勅也。

金甌之國、雖<sup>二</sup>万万無<sup>一</sup>欠乎。時有<sup>二</sup>盛衰<sup>一</sup>、世有<sup>二</sup>汚隆<sup>一</sup>。爲<sup>二</sup>

人臣者、豈可<sup>レ</sup>束<sup>二</sup>手<sup>一</sup>於其間<sup>一</sup>乎。当<sup>二</sup>勞心勞力<sup>一</sup>、各任<sup>二</sup>其

責<sup>一</sup>、死<sup>レ</sup>而後已<sup>レ</sup>耳。不然者國之蠹魚、罪不<sup>レ</sup>容<sup>二</sup>于誅<sup>一</sup>。護

國之法、蓋亦多端。然大略不<sup>レ</sup>過<sup>二</sup>四事<sup>一</sup>也。一曰富國、

二曰強兵、三曰立教、四曰交外。四者於<sup>レ</sup>國、猶<sup>二</sup>四時於<sup>レ</sup>

天。闕<sup>一</sup>一則不可也。恭惟<sup>二</sup>國家膺<sup>一</sup>維新之運、旧弊悉除、

新利悉興。墾地殖産通市制器、所以富<sup>二</sup>國也。軍分<sup>二</sup>水

陸<sup>一</sup>、有<sup>二</sup>鎮台分營等之設<sup>一</sup>、所以強<sup>二</sup>兵也。築<sup>二</sup>學校<sup>一</sup>、

起<sup>二</sup>教院<sup>一</sup>、講習曉諭、俛焉<sup>レ</sup>尽力、所以育<sup>レ</sup>才<sup>一</sup>、發<sup>レ</sup>蒙也。

置<sup>二</sup>外務之官<sup>一</sup>、獻<sup>二</sup>酬玉帛<sup>一</sup>、貿<sup>二</sup>易貨財<sup>一</sup>、所以交<sup>レ</sup>外也。

天下之事、於<sup>レ</sup>是大備焉。廟堂之上、無<sup>レ</sup>復遺算、巖穴之

下無<sup>レ</sup>復遺才。臣讜劣、伏<sup>二</sup>在草莽<sup>一</sup>、莫<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>知識、亦將何

言。雖然沐浴<sup>二</sup>浴聖沢<sup>一</sup>、負<sup>二</sup>荷皇恩<sup>一</sup>、苟所<sup>レ</sup>蘊<sup>二</sup>于心<sup>一</sup>、不

敢<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>陳也。略<sup>二</sup>述<sup>一</sup>教義、不愧<sup>レ</sup>鄙陋。庶幾<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>補

乎國家布教之万分<sup>一</sup>矣。至于<sup>二</sup>四事<sup>一</sup>施行之術、有<sup>二</sup>肉食人<sup>一</sup>、

不<sup>レ</sup>敢贅<sup>二</sup>出位之言<sup>一</sup>焉。

或曰、祭事爲<sup>レ</sup>政、事<sup>レ</sup>神臨<sup>レ</sup>民、初<sup>レ</sup>無<sup>二</sup>一致<sup>一</sup>。立<sup>二</sup>于廟堂<sup>一</sup>

而爲<sup>レ</sup>政者、容貌衣食不可<sup>レ</sup>失<sup>二</sup>神州之儀則<sup>一</sup>。散髮短袖

非<sup>二</sup>神州之容儀<sup>一</sup>也。昔者無<sup>レ</sup>貴無<sup>レ</sup>賤、禁<sup>レ</sup>食<sup>二</sup>芻豢<sup>一</sup>。一

犯<sup>レ</sup>此律、則終身不得<sup>レ</sup>接<sup>レ</sup>神。故稱<sup>二</sup>之長忌<sup>一</sup>也。然則六

畜非<sup>二</sup>神州之食<sup>一</sup>也。孟子車有<sup>二</sup>云<sup>一</sup>。服<sup>二</sup>桀之服<sup>一</sup>、誦<sup>二</sup>桀之

言、行<sup>二</sup>桀之行<sup>一</sup>、是桀而已矣。容貌衣食、不<sup>レ</sup>異<sup>二</sup>于洋人<sup>一</sup>。

是亦洋人而已。洋人而祭<sup>二</sup>國神<sup>一</sup>、神豈享<sup>レ</sup>之哉。必也人

其人、服<sup>二</sup>其服<sup>一</sup>、食<sup>二</sup>其食<sup>一</sup>、然後可<sup>レ</sup>以事<sup>レ</sup>神也。子以爲<sup>レ</sup>

何如。余曰。子焉得<sup>レ</sup>此譬說也、我明語<sup>二</sup>子<sup>一</sup>。夫時勢逐

氣運<sup>一</sup>而變。視<sup>二</sup>時制<sup>一</sup>宜者爲<sup>二</sup>智者<sup>一</sup>、守<sup>二</sup>旧株<sup>一</sup>而不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>

應<sup>レ</sup>變者爲<sup>二</sup>愚者<sup>一</sup>。且就<sup>二</sup>支那<sup>一</sup>論<sup>レ</sup>之。堯舜之授受、一變

爲<sup>二</sup>湯武之革命<sup>一</sup>。虞仲之斷髮文身、仲尼以爲<sup>二</sup>廢中<sup>一</sup>權



又曰、殷因於夏禮、所損益、可知也。周因於殷禮、所損益、可知也。其或繼周者、雖百世、可知也。麻冕、禮也、今也純、儉、吾從衆、變通無方、要歸正理。是聖人之所、以為聖人也。今也海外諸國、氣運大開、文物日美、工伎月精。制巨艦而浮海、則以三万里為比隣。六大之州、彼此往來者、舟帆如織。當是之時、何國能得鎖港獨立乎。折輓而行車、必不可得也。講和而無信。何以異此。然而不察朝旨、主張攘夷之說者有焉。斬戮來港之客者有焉。嗚呼四海之民、兆民之衆、何暇戶曉人論。豺虎雖猛、拔其爪牙、則不異于麋鹿。脫士之佩刀者有以哉。若夫貴洋儀、甘洋食、讀洋書、服洋菜、用洋器、賞洋行者、無他。破固見、推陋習之好手段而已。如此而後和親可結、國家可保。敬神之義、孰大焉。苟不害于綱常倫理、何有於曲禮少儀哉。故曰、大德不踰閑、小德出入可也。

旨向也。謂意之所向也。本身也。謂以身處其地而察其意也。敬神之旨者、報本反始是也。其目四曰、正心術也、守其位也、重祭祀也、愛國家也。

愛國之旨者何、嚴守國體是也。其目二期、皇道之盛也、立護國之法也。夫士則有士之敬神愛國之道、工則有工之敬神愛國之道。四民各不出其位、固守其分、以體于敬愛之旨、戰兢不懈、雖欲國家不光大、得乎。

可明天理人道事

率天理之道、神州之所固有、固莫待支那之教焉。然自應神朝、傳儒教以脩飾我道、歷朝一軌、至今不易。苟欲窮道之奧窔、舍儒而何以為哉。竊探經籍之幽旨、叙述教義如左。

易所謂有極、元亨利貞等之德、以左右陰陽者、自我觀之、則天神之德使然而已。抑既撰儒典為之解、則不得復贊神德也。讀者幸莫怪焉。

陰陽未形之初、沖然漠然、無可見矣、無可聞矣。易謂之太極、然未可知其果為何物也。或以為理為元氣者、皆出乎其臆焉耳。竊按以有推無、以形察無形、則雖不中不遠矣。天有生万物之德、之謂元。易曰、大哉乾元、萬物資始。至哉坤元、萬物資

生。又曰、天地之大德曰生。不其然乎。由是推之、  
本來自然、有下陰陽之德存焉。此元之又元、不可  
得而名狀。故唯名之太極也。若夫未有天地、以此而  
生天地、既有天地、以此生人生。物必有其  
条理。物理隱然蘊在太極之德矣。人見其一辺也、  
乃曰、太極者理也。朱晦庵有德必有氣。雖陰陽未形、  
大氣混淪充塞太極之德矣。人見其一辺也、乃曰、  
太極者元氣也。齊等

一而大、謂之天。見鶴林、玉露而理蘊其中矣。故天有  
以形言者、有以理言者。詩曰、謂天蓋高。下民之孽  
匪降自天。悠悠蒼天、論語猶天之不可階而升  
歟之類、皆以形言也。孟子曰、莫之為而為者天也。  
以理言也。夫天理者言天之理也。合形與理之稱  
也。然天然自然之理、謂之天理、則理辺為重。蓋天  
有天地以心、易生物為心。而無念慮。故其所為皆自然也。雖自然、  
条理秩然在其中而不紊。故名之天理也。天理道之  
所出、不詳其為何物、則人道何以得明之乎。学  
者其不可忽焉。

理道之用。而道原於德矣。故理也、道也、德也。其

(理)名雖異、其体則一而已。夫有物而后有两条理。詩曰、  
折薪拖矣。又曰、有物有則。程氏曰、在物為理、  
不其然乎。故有天道而後有天理也。天道者何、  
陰陽是也。易曰、一陰一陽之謂道。又曰、立天之道、  
曰陰與陽。不其然乎。天之生物、莫不由  
陰陽之變化。故曰、乾道變化各正性命。各正性命、  
即条理秩然也、所謂天理也。易曰、天地之大德曰生。  
德者得也。記在天地則得諸太極、使万物亦以各得  
所、謂之德。在人則得諸天、又得諸道、謂之德。  
若夫陰陽者、生於何処乎。曰、生於太極也。易曰、  
易有太極、是生兩儀。不其然乎。太極者何、曰、難  
言也。雖然、德者得也。天地之大德曰生。由是推之、  
則生陰陽者、亦可以名德歟。余故曰、理道之用  
而道原於德矣。然則陰陽未有之前、獨有太極而已。  
有陰陽而後太極寓于其中、而為之主宰。其名曰元  
亨利貞。何以知之。曰、易曰、大哉乾元万物資始、  
至哉坤元万物資生。夫生万物者、不外于元、則所  
謂天地之大德、非元而何。太極之德、以生陰陽、則  
陰陽舍此德而何以得生万物乎。元与太極、為同

體異名者、於是乎見焉。雖然、太極者、沂而推上古之名也。故周濂溪曰、無極而太極也。太極雖位於陰陽之上乎、而下寓於陰陽、則陰陽之物已。於是亦不可名之太極也。故名之曰元亨利貞。苟無四德之依於陰陽、乾道何由得變化乎。乾道不變化、即天理何由得條貫乎。如此則理道之用、而道原於德也。亦奚疑。

中庸曰、苟不至德、至道不凝焉。莊子曰、道理也、道無不理。由是觀之、道統理、而德亦統道也明矣。莊子曰、泰初有無、無有無名、一之所起有一而未形、物得以生。謂之德。莊叟之言、亦妙符于易。四時之行、百物之生、皆神德使然。易曰、天地之大德曰生。似仲尼暗曉此義。豈不亦妙乎。陰陽氣也。而謂之道。誠德也。亦謂之道。其義如何。曰、道道路之義。孟子、道若大路、又道理之義。莊子、道者天運之所必由、猶人之由道路而行。然、故曰、一陰一陽之謂道。陰陽繙蕃、萬物之条理、一毫不差。一毫不差、豈非誠乎。且夫運行之健、一瞬不息。一瞬下息、亦可以為誠矣。中庸、至誠。故曰、誠者天之道也。

中。各有所當而云爾。豈有經義不合一其符者哉。

大人者與天地合其德。德以兼道與理也。立天之曰、曰陰與陽。道以兼德與理也。滅天理窮人欲者也。理以兼德與道也。程明道曰、道亦器、器亦道。余亦曰、德亦道理、道亦德理、理亦德道。易曰、形而上者、謂之道。形而下者、謂之器。朱註、卦爻陰陽皆形而下者、其理則道也。以上文觀之、卦爻陰陽者、指乾坤而言也。乃至於成象之謂乾、見乃謂之象、形乃謂之器、而窮矣。夫乾可謂之象、不可謂之形也。而曰陰陽皆形而下者、何也。象南方大獸、中國人不識之。但見凶寫者。故借義訓為形似也。形踐形子、形固可使如槁木。莊之類、言痕迹既露者、非形似之義也。陰陽者氣而已、有象無形。豈得謂之形而下者乎。晦庵拗捩謬解、強合其家學。亦英雄欺人者耳。程朱家學、理必在氣之中、所以一陰一陽者道也。其意以為、若曰陰陽形而上者、則何以分理氣為、乃戾于太極生兩儀之義矣。凡物生於理、成於氣、而氣亦理之所生。故自理觀之、則雖氣亦是一物已、謂之器、而可。殊不知陰陽蘊蓄太極之德、在萬形之上、為之父母也。夫太極為理氣之宗、而寓於陰陽、則方陰陽生、物之時、理亦不得不俱具焉耳。故曰、有物者、則非理生、物也。立天之道曰陰與陽之道、亦可以為理、則天之道、

既天理也。然則立<sub>二</sub>地之道<sub>一</sub>、曰<sub>二</sub>柔与<sub>一</sub>剛、立<sub>二</sub>人之道<sub>一</sub>、曰<sub>二</sub>仁与<sub>一</sub>義之道、亦將曰<sub>二</sub>地理人理<sub>一</sub>乎。豈不<sub>二</sub>笑話<sub>一</sub>乎。余故曰、道道路之義、陰陽天之所<sub>二</sub>率由<sub>一</sub>、剛柔地之所<sub>二</sub>率由<sub>一</sub>、仁義人之所<sub>二</sub>率由<sub>一</sub>、穩貼不可<sub>二</sub>易而已<sub>一</sub>。人道者何。可<sub>二</sub>一言<sub>一</sub>而盡<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、曰<sub>二</sub>仁而已<sub>一</sub>。道<sub>二</sub>仁与<sub>一</sub>不仁而已矣。本立而道生、孝弟也者、其<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>仁之本与<sub>一</sub>、忠恕違<sub>二</sub>道不<sub>レ</sub>遠<sub>一</sub>。又有<sub>二</sub>加義而言者<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>人之道<sub>一</sub>、曰<sub>二</sub>仁与<sub>一</sub>義。仁者人也、義者宜也。仁人心也、義人路也。之類可<sub>二</sub>以見<sub>一</sub>。抑推<sub>二</sub>排<sub>一</sub>之、則為<sub>二</sub>五倫<sub>一</sub>為<sub>二</sub>五常<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>孝弟忠信温良恭儉慈惠敬愛等許多之道<sub>一</sub>、何以得<sub>レ</sub>然也。曰、元者統<sub>二</sub>天之德也<sub>一</sub>、人得<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以為<sub>レ</sub>仁、則仁之統<sub>二</sub>万善<sub>一</sub>、固其所也。子張問<sub>二</sub>仁於孔子<sub>一</sub>、孔子曰、能行<sub>二</sub>五者於天下<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>仁矣。請問<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、曰、恭寬信敏惠、此仁、統<sub>二</sub>万善<sub>一</sub>之明徵也。仁者人也、言<sub>二</sub>人之所<sub>一</sub>以為<sub>レ</sub>人也。禽獸則無<sub>二</sub>惻隱之心<sub>一</sub>。故曰、狼子野心。人則得<sub>二</sub>天地生物之心<sub>一</sub>以為<sub>レ</sub>心。故生有<sub>二</sub>愛物之心<sub>一</sub>以為<sub>レ</sub>愛物之行。是為<sub>二</sub>人之所<sub>一</sub>以為<sub>レ</sub>人。夫舍<sub>レ</sub>人為<sub>レ</sub>己、為<sub>二</sub>人欲之私<sub>一</sub>、忘<sub>レ</sub>己愛<sub>レ</sub>人、為<sub>二</sub>天理之公<sub>一</sub>。然則私欲<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>、天理<sub>レ</sub>、天理全<sub>レ</sub>、即<sub>レ</sub>仁、仁能統<sub>二</sub>万善<sub>一</sub>者、以<sub>二</sub>天理之全体<sub>一</sub>故已。

仁專言<sub>レ</sub>之則為<sub>二</sub>万善之長<sub>一</sub>、偏言<sub>レ</sub>之、則為<sub>二</sub>愛人之道<sub>一</sub>。然<sub>レ</sub>非相違<sub>レ</sub>也。何<sub>レ</sub>則仁原<sub>レ</sub>乎天地生物之心、生物之心即愛物之心也。故曰、愛<sub>レ</sub>之欲<sub>二</sub>其生<sub>一</sub>。夫親本<sub>二</sub>乎父子相愛<sub>一</sub>、義本<sub>二</sub>乎君臣相愛<sub>一</sub>、別本<sub>二</sub>乎夫婦相愛<sub>一</sub>、序本<sub>二</sub>乎長幼相愛<sub>一</sub>、信本<sub>二</sub>乎朋友相愛<sub>一</sub>。舍<sub>レ</sub>愛則万道不<sub>レ</sub>成、仁專言<sub>レ</sub>之、則為<sub>二</sub>万善之長<sub>一</sub>。故偏言<sub>レ</sub>之、亦不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>通<sub>二</sub>万善<sub>一</sub>。故孟子偏<sub>レ</sub>言之曰、仁人心也、義人路也。害<sub>レ</sub>物為<sub>二</sub>獸心<sub>一</sub>、愛<sub>レ</sub>物為<sub>二</sub>人心<sub>一</sub>。愛心以接<sub>レ</sub>物、此万道所<sub>二</sub>以得<sub>レ</sub>實踐<sub>一</sub>也。

或曰、元亨利貞、文言以為<sub>二</sub>人事<sub>一</sub>而配<sub>二</sub>仁礼義貞<sub>一</sub>已。非謂<sub>二</sub>天賦<sub>一</sub>此四德於人、以為<sub>レ</sub>仁義礼智之性也。故結文曰、君子行<sub>二</sub>此四德<sub>一</sub>者、故曰<sub>二</sub>乾元亨利貞<sub>一</sub>。伊藤東涯、弁<sub>レ</sub>之審矣。子以為<sub>レ</sub>何如。余曰、陰陽剛柔、天地本具之道、而仁義礼智、生民固有之道也。故繫辭曰、昔者聖人之作<sub>レ</sub>易也、將<sub>二</sub>以順<sub>一</sub>性命之理。是以立<sub>二</sub>天之道<sub>一</sub>、曰<sub>二</sub>陰与<sub>一</sub>陽、立<sub>二</sub>地之道<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>柔与<sub>一</sub>剛、立<sub>二</sub>人之道<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>仁与<sub>一</sub>義。象曰、乾道變化、各正<sub>二</sub>性命<sub>一</sub>。中庸曰、天命之謂<sub>レ</sub>性、率<sub>レ</sub>性之謂<sub>レ</sub>道。三書映帶而義始<sub>レ</sub>全矣。夫乾道之變化、非<sub>二</sub>元亨利貞之運行<sub>一</sub>而何然。而人物各正<sub>二</sub>性命<sub>一</sub>者

一由「乾道之變化」則將「舍元亨利貞」向「何處」而求「人性」乎。大哉乾元万物資始、即天命之謂「性」也、率「性」之道、即「仁義禮智」而「仁」又為「其長」也。故曰、「元者善之長也。君子體「仁」、足以「長」人。蓋元者德之首、而仁者善之長也。故元在人則為「仁」、君子體「仁」、而後可以與「天地」合「其德」矣。亨者元之通也。乾道亨通、而後莫「物」不「嘉美」。故亨在人則為「禮」。利者元之遂也。乾道施「利」、而後莫「物」不「得」其「宜」。故利在人則為「義」。貞者元之成也。乾道終「功」、而後莫「物」不「貞固」。故貞在人則為「智」。凡物知「其理」而處置得「宜」、則事不「敗」。智有「貞固之義」、可「以見」。孟子曰、「君子所「性」、仁義禮智、根「於心」。蓋本「於此」矣。諸經之語、吻合如此、而猶且不信之。不遇「博浪之一椎」、疑塊不「碎」。嗚呼亦可憫哉。

仁雖「固」可「分」性情體用內外、只是一德之動靜而已。非曰「其體之渾然在中者為「性」、其用之躍然發外者為「情」為「緒」、全體則依然「而常在中也」。譬「諸水」、潛「伏」地中「者為「體」、湧「出」地表「者為「用」。迨「用之既發」、曰「水之全体猶在「地中」、豈理「乎」。孟子四端之說、特就「常

人而言之耳。故曰、「無「惻隱之心」非「人也」。凡愚雖「氣」稟偏駁、而不能「德性純粹」。苟亦人也、豈無「惻隱之心」乎。拔而充之則猶「燭火」可得而為「燎原之火」、細泉可「得而為「四海之水」也。若曰、「仁之全体渾然在中、而其端緒微見」於隱者、為「物欲所「遮蔽」。故不「得」不然。則「擴充」者為「弘」除「物欲」之謂乎。故余以為、「仁之靜」而未動、為「性」為「體」為「內」。動而發、為「情」為「用」為「外」。抑無「離體有用之理」、則「惻隱之情」、即「仁性」發、而「體用全露」乎外、而莫「復餘蘊」在中者。故性情體用內外、只是一德之動靜、而皆可「以名」仁也。孟子曰、「君子所「性」、仁義禮智。又曰、「惻隱」董仲舒唯知「以「仁安」人、而不知「安人即人之所「以為」人。故曰、「所以治「人」與「我者、仁與義也。以「仁安」人、以「義正」我。故仁之為「言」人也、義之為「言」我也。太田錦城曰、「仁者人也。趙台卿、鄭康成所註不明。得「仲舒之解」、昭明確的、無「可」容「疑」。又曰、「仁者人也、接「人」之道也。果「其說之是耶。其奈「仲尼顏淵所謂「修身以「道」、修「道」以「仁」、仁者自愛「何。韓昌黎不知「仁可「為」性。故曰、「博愛之謂「仁」。朱晦庵不知「善行可「為」仁。

故曰、愛之理、心之德也。伊藤仁齋不知仁爲人性。故曰、孟子以仁義爲固有者何也。蓋謂人之性善。故以仁義爲其性也。此以仁義名性也。非直以仁義爲人性也。物徂徠不知仁爲人性爲人心。故曰、安天下之道也、安民長人之德也。龜井南溟蓋不知仁爲何物。故曰、其人仁賢成德、而後仁可得而言也。苟未成其德也。雖得於言、夫子不取焉。故欲知仁者、要在務成德、而不在知仁之爲務也。母乃遁辭乎。嗚呼、不使楊朱哭于塗路者幾希。可勝嘆哉。

無惻隱之心、非人也。非人則禽獸而已。禽獸則無惻隱之心。故曰、無惻隱之心、非人也、人者非人之反也。然則有惻隱之心、人、惻隱之心、仁也。故曰、仁者人也、人者得天地生物之心以生。故有愛物之心也。愛之欲其生。故有不忍人之心。故見孺子將入於井、有怵惕惻隱之心也。此人之所以爲人、而所以異于禽獸也。故曰、仁者人也。如此解得青天白日、無有纖翳。錦城所謂得仲舒之解、昭明確的、無可疑者、猶是夢中說夢耳。

仁者万善之長也、亡論於人道爲全。故曰、仁者人也。蓋即偏言而專言之也。義禮智者、仁之細屬、而人道之一端而已。不得曰、義者人也、禮者人也、智者人也。家語問管仲、曰、仁也。論語問管仲、曰、人也。仁與人通、可以見。仁者人也、仁人心也。思孟之語、皆自仲尼來。

諱弁、若父名。仁子不得爲人乎。仁者人之所以爲人、在唐退之既知之。非宋儒發明也。

親義別序信、天叙之典、而爲天下之大經也。仁義禮智、天賦之性、而爲天下之大本也。經常也、五品之人倫、爲生民經常之道。故曰大經。中廣、唯天下至誠、爲能經綸天下之化育。未註、大經者、五品之大本者、所性之全體也。曰達道。中廣、立天下之大本、知天地之化育。大經者、所性之全體也。曰達道。二、曰、君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。達通也。通、上下古今、所共由之道。而道本乎性焉。此仁義禮智所以統万道也。親義別序信、五品之人倫、而各有所當、則未可初漫然曰統万道也。抑親仁也、義義也、別序禮也。禮、禮者、信信也。信具于仁義禮智、而不可離、則五倫之与五常、隨處而異名而已。非有別体也。

以仁論人道、示道之禮統而已。至乎論夫婦之愚、

宜<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>五典<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>先<sub>ト</sub>也。此<sub>二</sub>帝三王所<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>教<sub>ル</sub>民<sub>ヲ</sub>。而後王之所<sub>二</sub>準則<sub>一</sub>也。讀者留<sub>レ</sub>意<sub>ヲ</sub>馬<sub>ヲ</sub>焉。

天地也者、活物<sub>ニシテ</sub>。而變動無<sub>レ</sub>常也。從<sub>テ</sub>氣運之變化<sub>ニ</sub>而制<sub>ス</sub>宜<sub>ニ</sub>、為<sub>レ</sub>人道之常<sub>ト</sub>。夫陰陽有<sub>レ</sub>消長、而天步有<sub>レ</sub>陰易<sub>一</sub>矣。

是以人事亦不<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>治亂盛衰<sub>一</sub>也。今也版圖歸<sub>一</sub>、万国交通、彼此相益。有<sub>レ</sub>国威日升之勢、可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>氣運豐亨

之秋<sub>ト</sub>矣。抑不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>專委<sub>ス</sub>諸天道、當<sub>レ</sub>同心戮力、唾<sub>シテ</sub>手而尽<sub>レ</sub>財成輔相之道、以挽<sub>レ</sub>回造化、使<sub>レ</sub>治者益治、盛者

滋盛、畢世無<sub>レ</sub>亂衰之時<sub>一</sub>耳。此謂<sub>レ</sub>致<sub>ス</sub>臣子之職<sub>ト</sub>。天為<sub>レ</sub>健<sub>ト</sub>、為<sub>レ</sub>円<sub>ト</sub>、故運<sub>レ</sub>而無<sub>レ</sub>窮<sub>一</sub>。此其所以妙用不<sub>レ</sub>測也。

抑理之在<sub>ル</sub>物、条<sub>ニ</sub>貫<sub>シ</sub>於千變万化之中。一定不<sub>レ</sub>易者、無<sub>レ</sub>他出<sub>ル</sub>乎、全体渾然有<sub>レ</sub>變用、而無<sub>レ</sub>變体<sub>一</sub>耳。所謂一本

万殊、豈<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>虚語<sub>一</sub>乎。全体渾然。故其德<sub>一</sub>一誠無<sub>レ</sub>息<sub>一</sub>。一誠無<sub>レ</sub>息、故<sub>レ</sub>一理条貫<sub>レ</sub>而不<sub>レ</sub>易也。動而無<sub>レ</sub>息、運<sub>レ</sub>而無<sub>レ</sub>窮

故妙用不<sub>レ</sub>測。妙用不<sub>レ</sub>測。故千變万化、不可<sub>レ</sub>端倪<sub>一</sub>也。審<sub>ニ</sub>于此理<sub>一</sub>、則天道變化、固<sub>レ</sub>不足<sub>レ</sub>怪<sub>一</sub>、况<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>世態<sub>一</sub>乎。

自<sub>レ</sub>小而大、大極而趣<sub>レ</sub>小、天理也。故自<sub>レ</sub>微暖<sub>一</sub>而大暑、暑極而微涼、以至<sub>レ</sub>于大寒<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>已。此四時之所<sub>二</sub>以循環

無<sub>レ</sub>端也。万理皆然、且以<sub>レ</sub>國勢<sub>ヲ</sub>論<sub>ス</sub>之。自<sub>レ</sub>太祖東征、剪<sub>レ</sub>伐<sub>レ</sub>荆棘、至<sub>レ</sub>開化朝<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>會通<sub>レ</sub>信于海外<sub>一</sub>。何<sub>レ</sub>則

以<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>國日淺<sub>一</sub>、人口未<sub>レ</sub>甚多<sub>一</sub>、制度未<sub>レ</sub>全備<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>暇<sub>一</sub>外務也。迨<sub>レ</sub>神功之西征、三韓之朝貢、歲相<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>于路、可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>盛矣。其後屬<sub>レ</sub>于國之多故、彼之礼意漸<sub>レ</sub>以衰。於是

乎、有<sub>レ</sub>豐臣氏之再举<sub>一</sub>也。若夫貿易中古來<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>於安南天竺等<sub>一</sub>、航海之術、將<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>漸精<sub>一</sub>。及<sub>レ</sub>邪教之來<sub>一</sub>、其事遂止。

鎖<sub>レ</sub>國者三百年、而<sub>レ</sub>至于<sub>レ</sub>万国交際之今<sub>一</sub>。一屈<sub>レ</sub>一伸、雖<sub>レ</sub>天理使<sub>レ</sub>然、人事亦未<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>利鈍<sub>一</sub>焉。嗚呼、人心靈莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>知。苟明<sub>レ</sub>乎天道通<sub>レ</sub>塞之理、予設<sub>レ</sub>之備、不<sub>レ</sub>專受<sub>レ</sub>制於造物者、何<sub>レ</sub>小大屈伸之有<sub>一</sub>。所謂先<sub>レ</sub>天<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>違也。

是之謂<sub>レ</sub>活手段<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>天地鼎立<sub>一</sub>、称<sub>レ</sub>三才<sub>一</sub>而已。天生<sub>レ</sub>民有<sub>レ</sub>欲<sub>一</sub>。其故何也。曰、人者為<sub>レ</sub>動物、匪<sub>レ</sub>飲食

衣服<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>生活<sub>一</sub>、而無<sub>レ</sub>欲<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>乎。若無<sub>レ</sub>饑而欲<sub>レ</sub>食、渴而欲<sub>レ</sub>飲、寒而欲<sub>レ</sub>衣、人之類滅<sub>レ</sub>久矣。飲食衣服可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>生

養<sub>一</sub>。則凡<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>人者、不可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>講<sub>レ</sub>生財之大道<sub>一</sub>也。殖<sub>レ</sub>物產<sub>一</sub>、利<sub>レ</sub>國貨<sub>一</sub>、皆出<sub>レ</sub>乎天理<sub>一</sub>、而人道之不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>已者而已。當<sub>レ</sub>周之末<sub>一</sub>、人心競趣<sub>レ</sub>功利<sub>一</sub>、仁義之心、日以消焉。是以孔

子言<sub>レ</sub>利罕<sub>一</sub>、孟子曰<sub>レ</sub>仁義<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>利<sub>一</sub>。學者眩<sub>レ</sub>其說<sub>一</sub>、談

僅及利之事、將掩耳而走避。然洪範八政、一曰食、二曰貨。孔子曰、足食富之。孟子曰、菽粟如水火、而民焉有不仁者乎。然則古人何必厭利為唯其所惡于利、逞私欲以害公利故已。夫彼此相益之謂公利。公利近乎義。故曰、利物足以和義。後覺之人、莫為腐儒所魅也可。

誠者徹上徹下之道也。初學入德、必自誠始。及其成功亦不外于誠也。故曰、誠者物之終始、不誠無物。若夫三條之教、徒拳之於口舌、以誇人而已、聽者亦以為馬耳之東風。所謂曰、明者、果安在哉。

可使奉戴皇上、遵守朝旨事

君者天也、臣者地也。天尊地卑。皇上其可、不奉戴乎。君者陽也、臣者陰也。陽唱陰和。朝旨其可不遵守乎。夫君臣之道、人之大倫也。為之天理人道之第一義。而重此條、豈不屋下架屋乎。窃按、譬諸滋味、上件猶魚肉、此條猶宰割之法。雖有鮮肉、不知所以調之、則不可以供盛饌也。自政權之歸武門、數百年於此、北條足利之事、不足論之。至豊臣德川

之時、天下之人、大抵知有霸府、而不知有皇室、不饜戾者幾希。今也雖幸遇皇運勃興、千歲一時之秋、陋習之久、奔趨文明維新之化者、其與幾人。枯于旧弊、失慧眼者、戴皇之心、亦不能以純粹、自然之勢也。可不長太息哉。雖朗月懸乎天、不知拳頭見之者、嬰兒也。雖盛饌列乎前、不知危坐食之者、孩童也。指空示月、因礼薦食。保傳之任已。

若夫君臣有義之教、民或以為陳言腐辭、不知所以用諸今日之法。是以殊料理此義、欲使癡頑之民、知天之嗣君臨于我、万古不易者、所以與彼霸者之倏興忽蹶、暫相為君臣者、不可同日而論之。維新皇政之膏澤、所以有八珍悅口之味外、豈有他哉。嗚呼、指導之人、鞠躬莫殞保傳之任、則破天下之蒙蔽、以至乎文明開化之域、可拳踵而待之而已。

三條述義

跋

凡物味淡者不足嗜、濃者可厭。淡而不淡濃、而不濃味之



上焉者也。詩家言曰、詩宜于淡不宜于濃、雖然須用濃後之淡矣。有味哉其言之也。酒之美者其色薄而氣烈、所謂淡而不淡也。人之嗜之不亦宜哉。若夫湯之白醴之濁、偏于淡與濃者、奚足以為席上之珍乎。述義之為事、雖僅々冊、亦能探幽釣深必窮道之大原、而後已。此輒生之所以苦解也。若以此遽施蚩々之民、則田方鑿不入其耳也。必矣、豈失于濃者非耶。抑此為說者謀不為聽者謀也。嗚呼手中無物、何以與人。詩曰、衣錦尚絅鏤飾其腸粉素其口內濃外淡待適乎。人意可以執談柄則如此書者可謂腹中織錦之好機杼矣。是為跋。

明治七年第九月

門人華山大權謹識